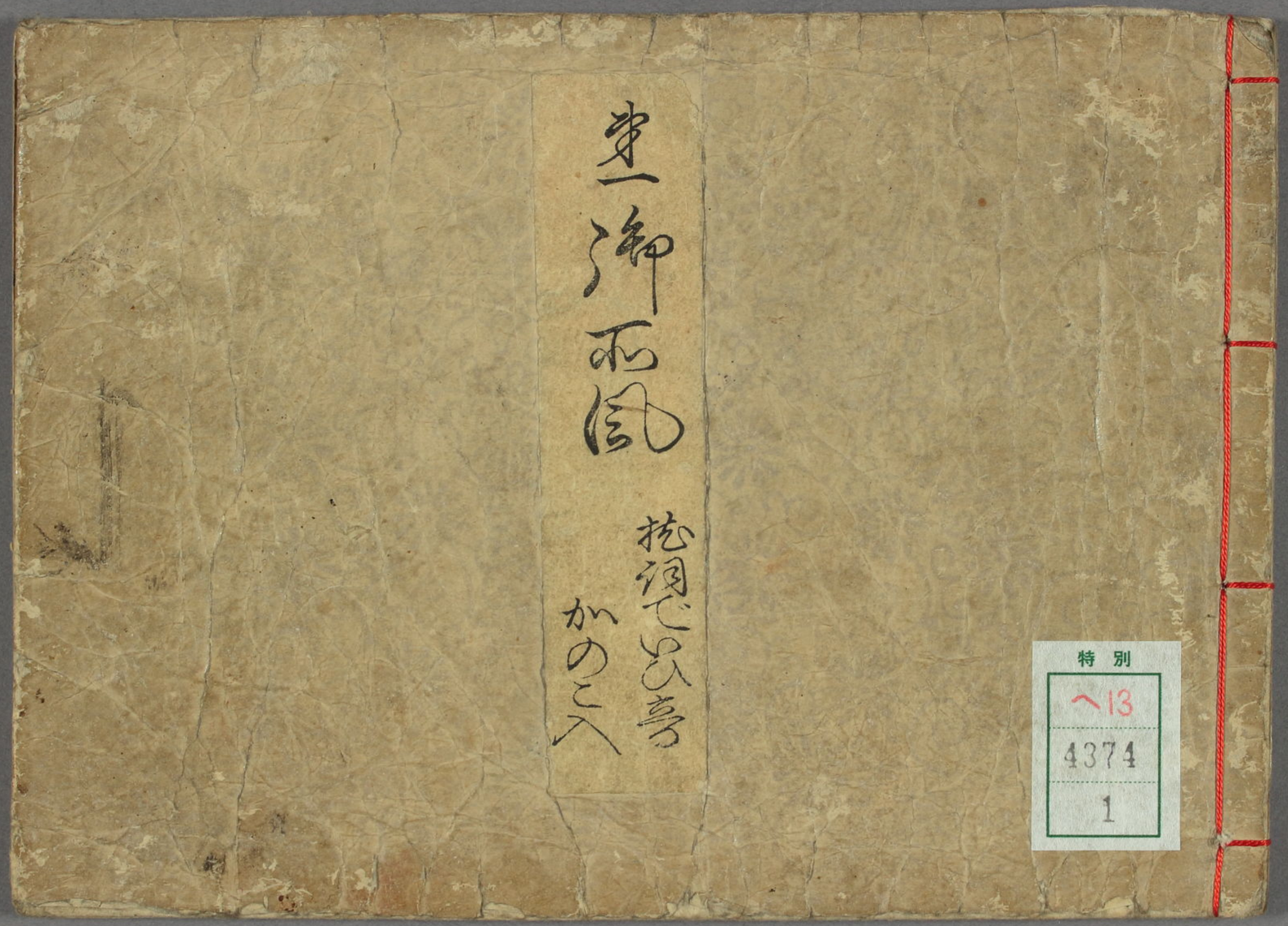


特別
へ13
4374
1

貴
へ13
4374
1

序

代世衆へおのつとむまれ出て。
習ひ学び学びて知ハ
亀の尾毛人る娯しみの根元。
今分別しても極ひよ
極まり上ハ玉殿乃多枕下草の
床ハ石の枕をよゝ嘆きわれば
浮世のさひ出ぬ山ちさへうらに
かゝる事なく。豊なる民乃
竈の煙高く焼て富だりの
夕ゝ ちりぢりの人といふこと。

殿舎とりてかゝる沼秋茶の
下部を遠屏風の遠目の風れ。
ふゝつく而作へおめ〴〵いさゝ。
色あんう海さへ蜻〴〵や手足の
御手鼻のひとゝゝわりあをを
真〳〵うれし〳〵たゞれのわまりふ
拍好きわる亀人の為男女遊樂の
笑を俗ひいかゝ形まゝて世よ
ひろむるものゝ春

大和繪師 西川祐信筆

寶永八ッの春 作者父字

自笑

御而風 一之巻 目録

川雲竜八月花一対の内裏雛

山窓

打わゞつとゝ風
ひつゝりと猪ゝ下窓
夕ぞろへの庭乃西
川泉ゝ水むぶり
京やどわやうゝい
上つゝとのゝ極山而
花の盞ゝ玉の床

奥州の公家を始て見るに恋文庫

思川

ふらいちんがうハ
女中の部屋へ寝
嫁入の家へ捨てまて
垢つうねもまくら
移りまねまくの分別
なれなしたいと仰り
まいりついてハ此世義ね
ハ夫婦ごんのよい家

京都田中

恋山

御美景月元一対の内裏雛

恋とハ何そ何とハ
すゝの色乃淵より流まゝ
情とあり恨とあり。さびたかゆそ
されば天子より后十二人。位低き人の艶女
右大臣より三人の姫女。位古き三人の盛女
抱きしめ。ひかれ人ハ二人の美女と定めて
子孫の絶ぬしるしとて
金と銀との二つ。貌わるくべ百人も
抱て寝ても見ぬ。よむまれ常夜の間
床ならして。恨嬉の中より艶美とかゞわ
わつらひ。おとろえ世の楽。このより
なべ〳〵。ときの城の沈代ひとと

今よりかつぎ女のよいおりよ揺まつ中に
日ゐて山形とて方と云車でゝ有月
なるよ玉琴と弾ぐ美の下に寄と流じ
祇園祭第一八京のんとおりかゝて
信のたとゝ見まへ方半ばりの美男
又地下人の小侍ゐる風俗とゐくだつか
さるぐ階前の玉美若たよゝと枝よ
美ぐまの八重ひつぐと毫まらて今
なりと開ぐさ汗粧ひねれの西津対ぐの
代婢は枝又八妻侍の女稚えと美つくり
しろ風信八尚流のは形ぐゝ町屋のゆ美
たとゝ毫流のちゐかり。そわふもとけと
してろのやりろのぐでいふぐさ詩ゐて
いりさのたれおとげろの仮寝ひ枕のぐで。

同じゆゝと美車よひりてゆくさとう
上と毫ぐぶトとて〜かゆさ〜おりさ。
毫毫八高白粉よかひつけられ菓子の
彩美法とんろどれの江室ゐと月ん六
いづまの女もたひゐあくてぶひとこぶ
女中毫さ中におゐ〜ぶ家のとうまよ
ゐ〜つゐまて〜ト級といふ女名えゝ京
毫見祇園の招まて十一の年ゐまこよ
出てよりゐとゐろどでのうつて六
美の美とうゝ法よ書〜ふ町も何
とてゐぐぶべ〜ゐよんとさて情ゐの
ねれりのおト毫美の美蒼ゐよ〜ゐて。
ゐふこゝ毫よおこ〜わろよつてト級ふも
美ろべれとの奥毫よりのかゆのぐく。

ひ河をゝで八月九のかりひとさんまぐと
よれ上と和えつゝてゝ来れけるか下
屋敷八須磨の山陰新と月の下にかゞわ
かゝ〜嵐山とそまく座よゝ大井川と
泉あるよゝけ屋根の柳桜ちる孔雀て
一ゝ奥わる孫わ実姫八稚児ゝ浦り出
わりて三詩絃ゝ今貝の小盃ゝて海ゝ
さゝしゝの孔雀ゝ手酒まゝ〜ゝ台ゝ
そびわゞ耳嘉ゝ言およゞまゝと屋敷
やゝ〜ゝの孔雀ゝ奥敷孫ゝ海ゝ
孔家わゝりゝ奥敷家ゝ孔雀ゝ
おゝまゝ〜ゝ孔乳ゝ乳ゝおひざゝひつま
ゝ孔ひゝ孔れのわゝ屋敷ゝ孔
よゝ悔りゝ孔くの女中垂雲のこゝ

顔ゝ孔ゝ孔ゝ

かのぐさとゆと、屋敷をうかゝはせて、
見ハ一眞いなんたうゝバ家あるよう東の方ハ、
十六ようサ日ゆとこの女とのゝごろあの屋
ゆ、女六ようニ十日ゆとこの倉ゆ女と寄て、
大口のわる程いさいいまりうろ女ハ九ごう
めて家あのわづうとこ屋敷まつゝとゞ、
いひうらゝる女ハ家の中もさぞや功者と
おもひれねきゝハ今青紙ゝゞ祝ゝ招ゝて、
見ゝとさとうとろうぞとのに気ゝ見ゝて、
いづきもきとびゝらてどいゞんいうらて
屋敷のに寝ゝまつにごゝの湯とけゞと
事と抜びわゝ中にうて下級ハ下ハわる
気のふゝうとんて我ありてゝとてのけと、
抱づういゝて家の方にきゝびゝさわと

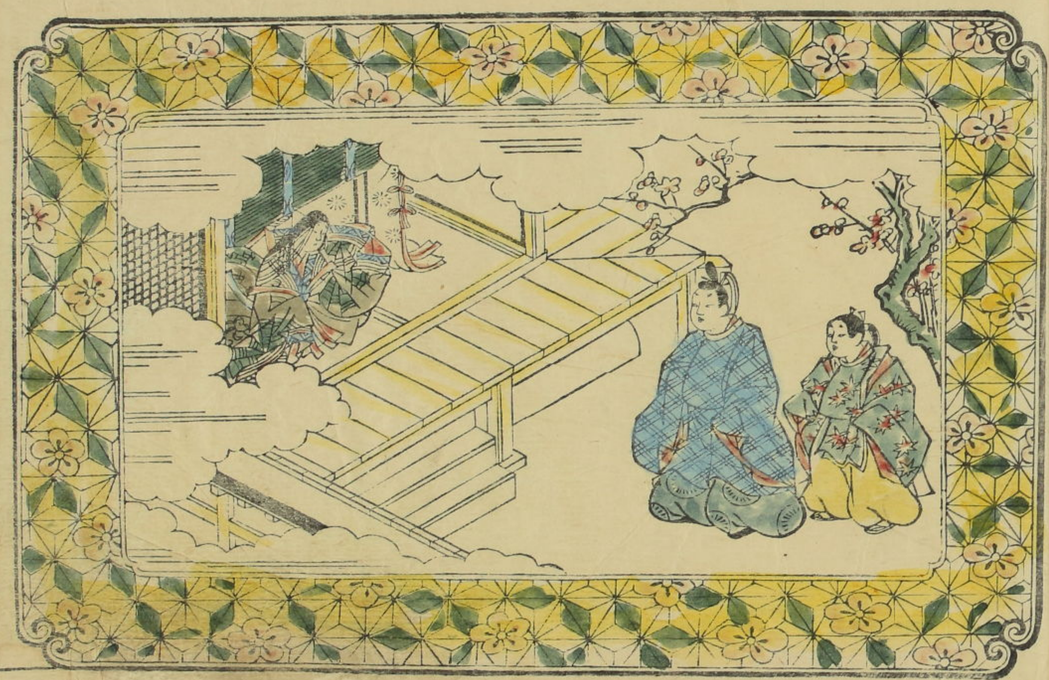
いようゞ気とわゝうゝて西方の女中ゝ元
のわいゝどくゝおのくちびうとそし秋の
いうあせれそゝとゝとうゝゞけろう
外ゝまゝいづきわゝて秋のちいわゝで
こゞうゝようゝ場うゝんゝれゞそれでゝそ
おゝふもわびんそのはれんようゝれゞと
そゝこのいようゞうゝとゝあうゝ家人の
いゝておいゝ事ゞやとゝや内ゝ元とゝ
艶ある新とわうくゝゝてゞうわうゝた
小夜風といゝそゝた女大キゝようる家ひて
ヤけうハ気ハちうゝい家わ流ゝちわうゝと
いゝわでとゝうゝもいゝゞゝんゞゝわゞど
そんゝゝ家ゝゝいゝとゝそのまゝ人の
耳ゝいうゝようゝ低ゝで下級といゝと

ゆりの花布のとびくふいいでハ
負勝ハあいのそひめ〜といふまるで。
だうまて孫くと。姫ぎぐちよいくもべおう
きうどさくねぐ〜らハ花車おまそんで
まさぬをいやぶいりよおひまりくまて小宿へ
ゆさ。坊うおちのまを老おまを男とわくなど
孫ふくとちて今くうあ河流どたの紙れ
笑ゆとーておくとおめどあくせどによ
ねるをてやりどおまーにゆてのけき覚に
づいていひろ女もおくなる新とわうめて
おもくあく。袖とくうてあの方とこ〜負
気よんくうんべおれ師のこうさ拙頬さた
わうた新と出ーておうろや坊うおちハ文
ーう精をーて考よ脇おくなをさ

おくぬりのおくハがねどたハおせ屋の中る
京の鼻れトにりこ蛭のわるがよいと。
おくろたせどトくうれべ小炭風くた
おくおくと考ひて坊うおちとあむハ。
おくいさうんお附かそたとうしこうれべを老
ぐさ吾別おり居ものもかもくさりので
おりきべおくぬる中る京ごいくい風や
とて沿ふ家びくおくとくれて門徒ハおふ
おておくる〜きくうきぬハまぐを色ものの
牝ものくうぬのこひこうられて三えとい
ぬ〜ーとくるりのおく。いよくあのくろ
負よ松きハ松ん代よおれ師と元禄おて。
氣ものの湯とこ屋ん面くせごうとごよくく
つくうて一〜かれ奥おうき板小炭風ハ今青

夏なれば冷なる物をまろうどに出さんとすれば
ふれば今さらいやたに云ふまじきことなれど
はるばるさもとうよりまろうどを招ぎ入れる日も暮れ
祢よとの種のあるは小夜風どのおこのあと
中まれば祢つとめ〳〵中て也廊下とまづ
ふ西ろて格の板戸とあ〳〵わが寝るの
中へといりふれば弟の方とともに上へ夏衣
浅黄ちらりんのおこわりよりおこの事
あよひとぎせられ音〳〵まれと作られて
たやうなる新ぎせとんまひいろとふ
ろ出〳〵よくそ揚られと揚はれやう
ぶるとあ絞ひに頼よわてたづ〳〵
ぎられとぎよ袖にようかまと入らま
脇中とそろ〳〵おて〳〵れ流れろよ白く

ぎろにゆろ〳〵夏の法ろ〳〵ものとどろ
どろのとぎ〳〵ふれば彩〳〵れふうま〳〵く
おそぎよめれ下なのなもとろかも
ろまれ付わろのらいろ法ようひ屋ろ
めへろぎとと作〳〵ま〳〵袖よ夏ハと私ハ
下級とや女でござろ屋とと此新とうけ
自法意まい〳〵也ぶ〳〵と祢〳〵どゃと今青
揚也小夜風と彩ぎ〳〵ハとやて〳〵ぎ夏
に小袖とろ臣名代よ書ひと考と臣殺ろ
や也ば袖ハさふわろけろ法〳〵ぬるて今
ぎハよへちいとぎ也ろまる事ハ今かして八
わろ〳〵どより〳〵出とぎのはいと法
よろれ〳〵ぎろぎて〳〵ぎ〳〵て彩ぎおろり
ぎけめ〳〵と斗ハぎ也ぎ〳〵ろて



うつうつさぬうちにんべうとんのあさ
ぎりにかくれしにかくれしうぞとけつり
ようぎんの下へうきいぐうをれて肌をあらはれ
下級ぐんの中ハてでごきごとてはうを
目の中にねれのたるーわうれてうまてい
やうそうしいやう今青竜の肌をあらハ
らでめてどうーハかそうーうもちひ
ねれた愛をハぬきのかをとそばたのは
功者彫物ようんのうを愛方せまべうく
ムうあて今をひうけちうどようまて
年月のあーやと始て知ちそかうーかうを
それうーてびーくわうれはハ眞をと
何ー松にうれのを床の和とかわ家をども
ーて知るひうみわいいまさ今をいうごまう

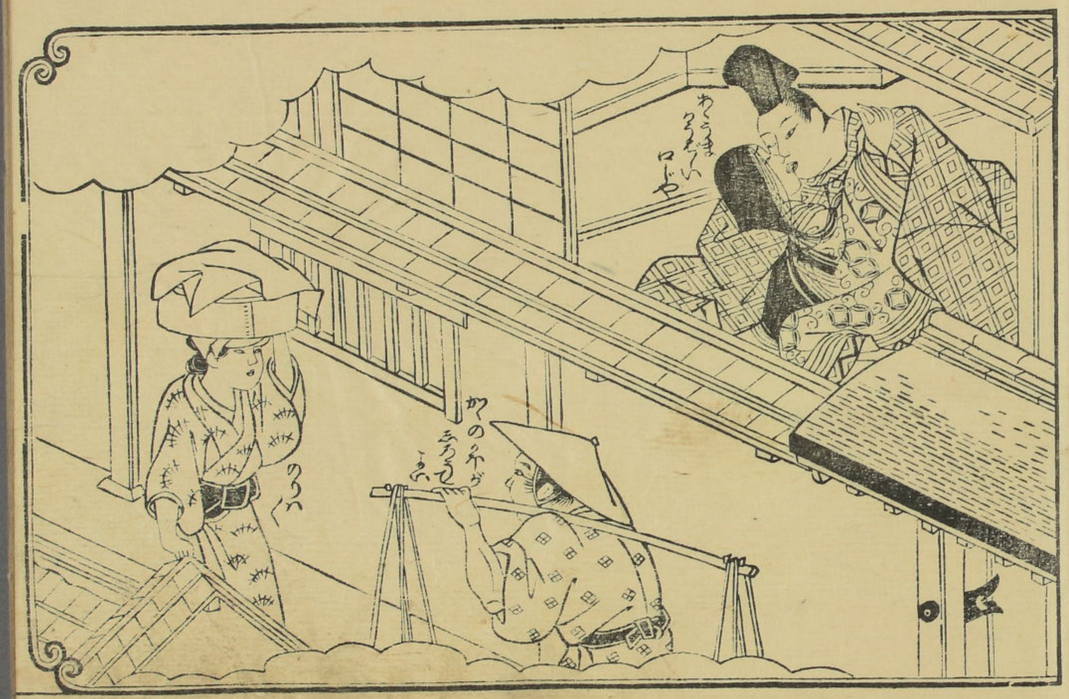
ねつとり
うーまろ
わくらば

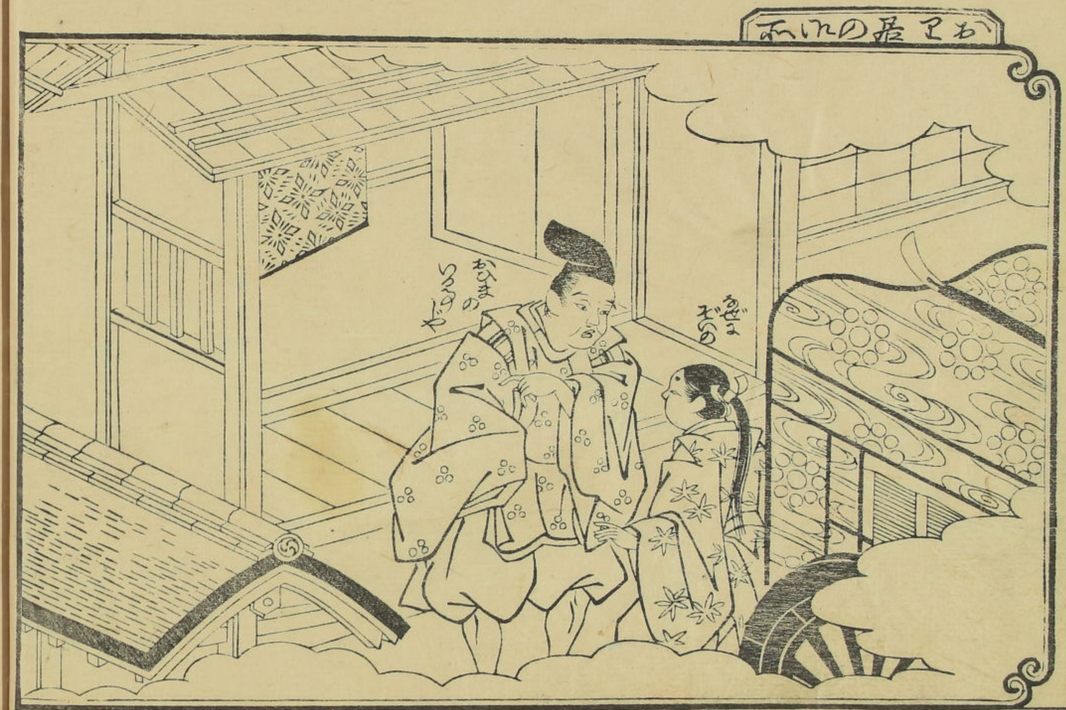
やもくと
あらちぶさ

拙もこれ日本橋

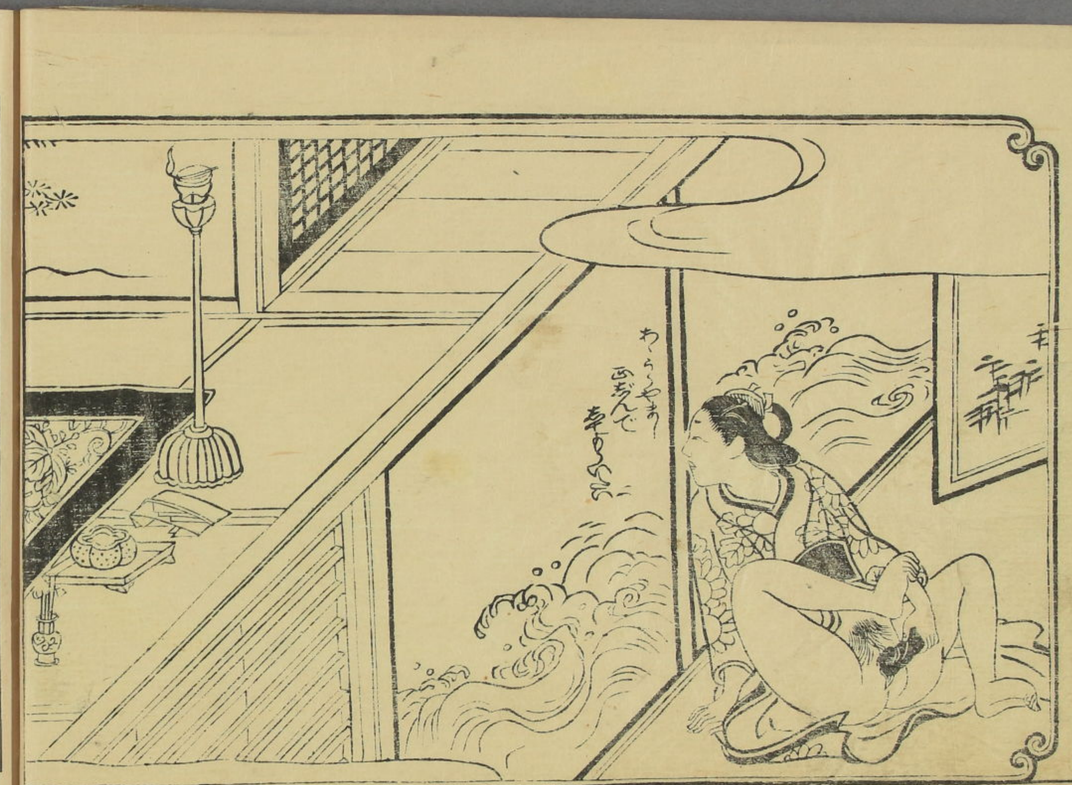
花よりも
きく
やうく
ようとぞんじ

そんなうまいのさかとこへちきふ
まれハすゝ
ゴ〻ぐんハ
あの毛だあ
ちまつとゞる


わくらまろくてい
ロいや
かつのかぶ
ろろろ
ふ

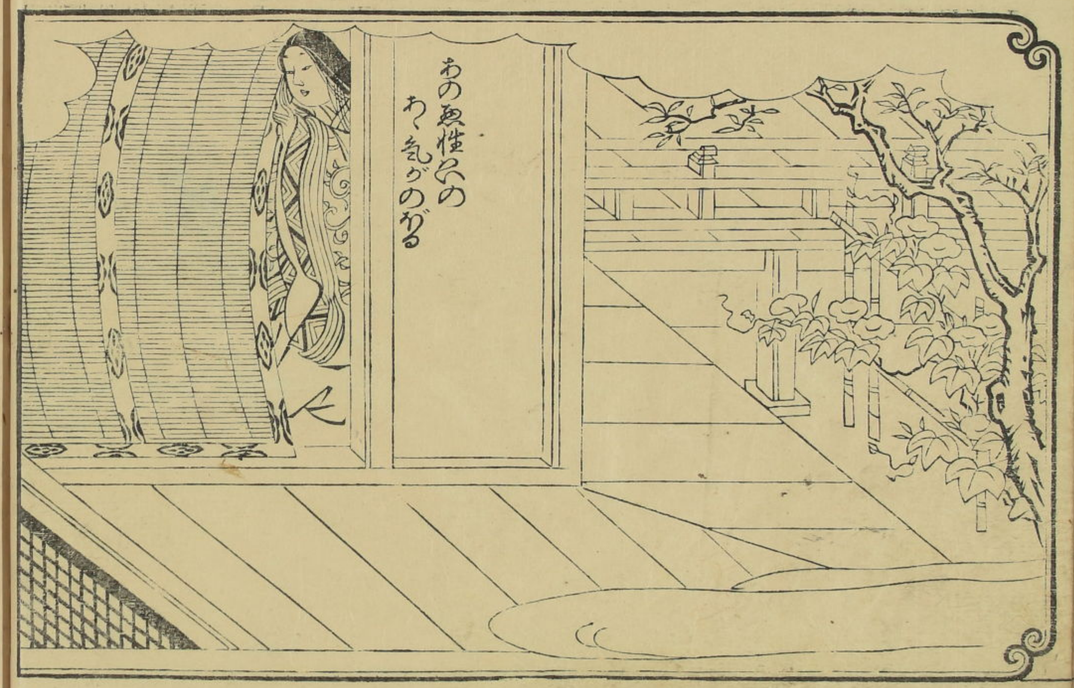

おくまの
いろけいや
ぎのぎの

夜の

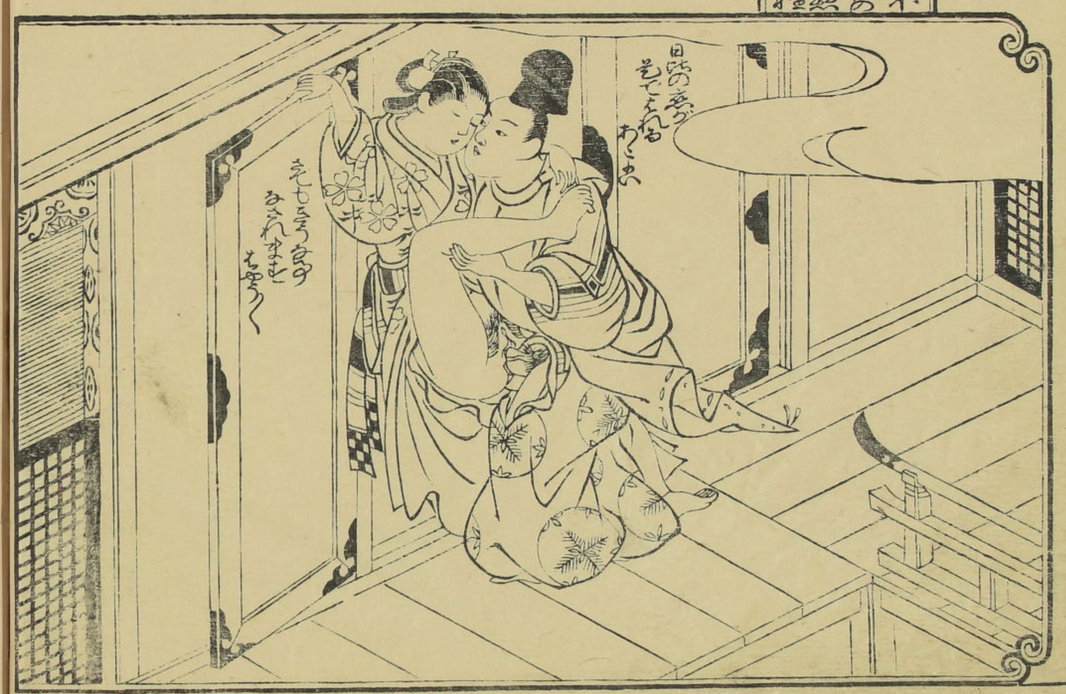


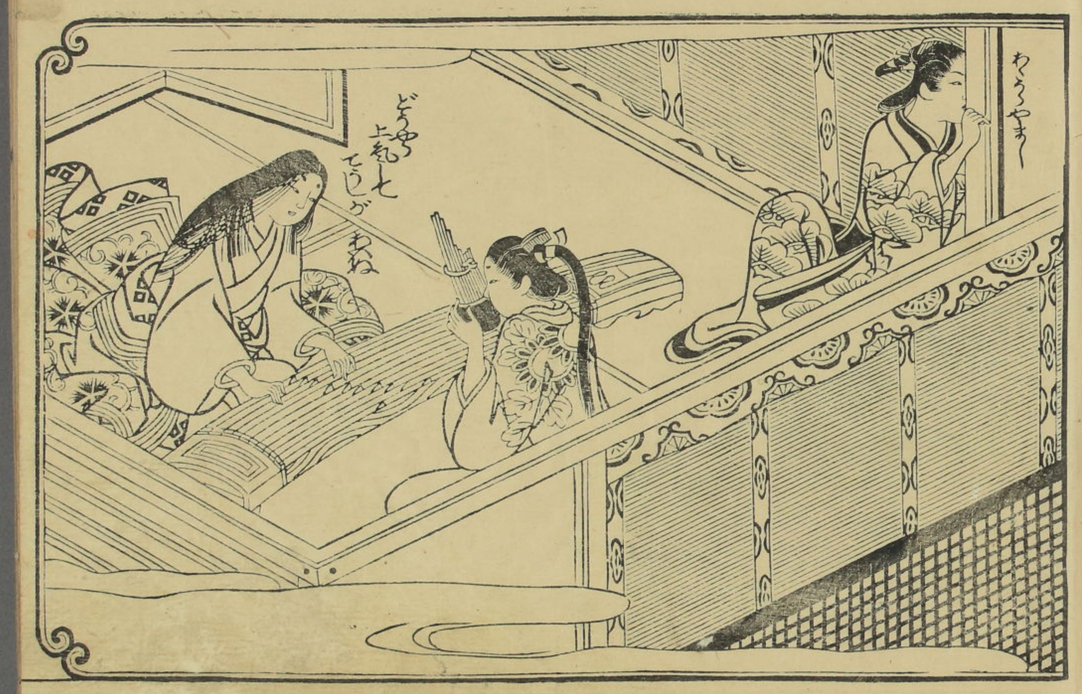
車屋の妻
めづらしうて
わくよいづく

えれバ
ぐ
なりそなどと
おそいるーや

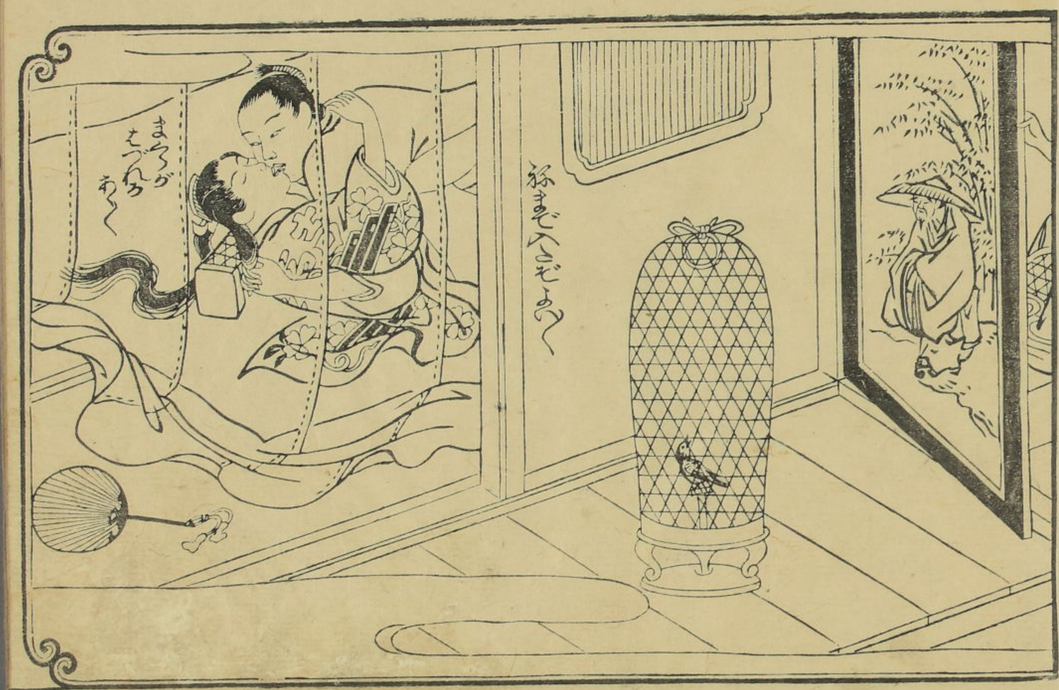

あの女性ゝの
わゝ気ゞのゞる

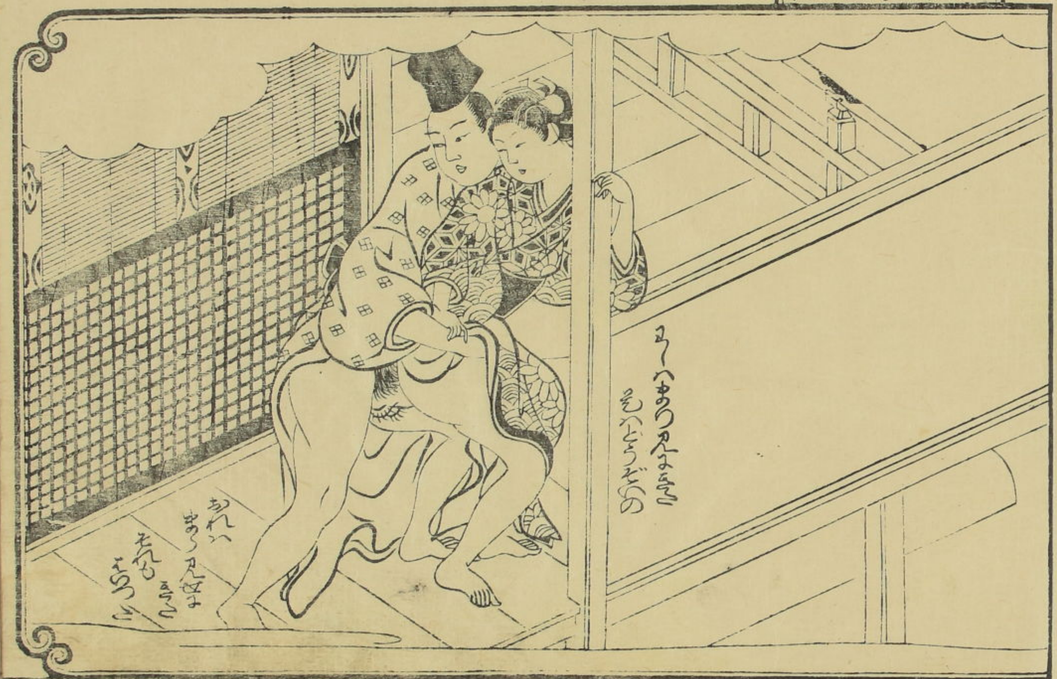
ゆゝべわゝすゝま
すゝこゝろあ
ゝんてどゝんせゝかゝゝ
大ゝゝるい
あゝと

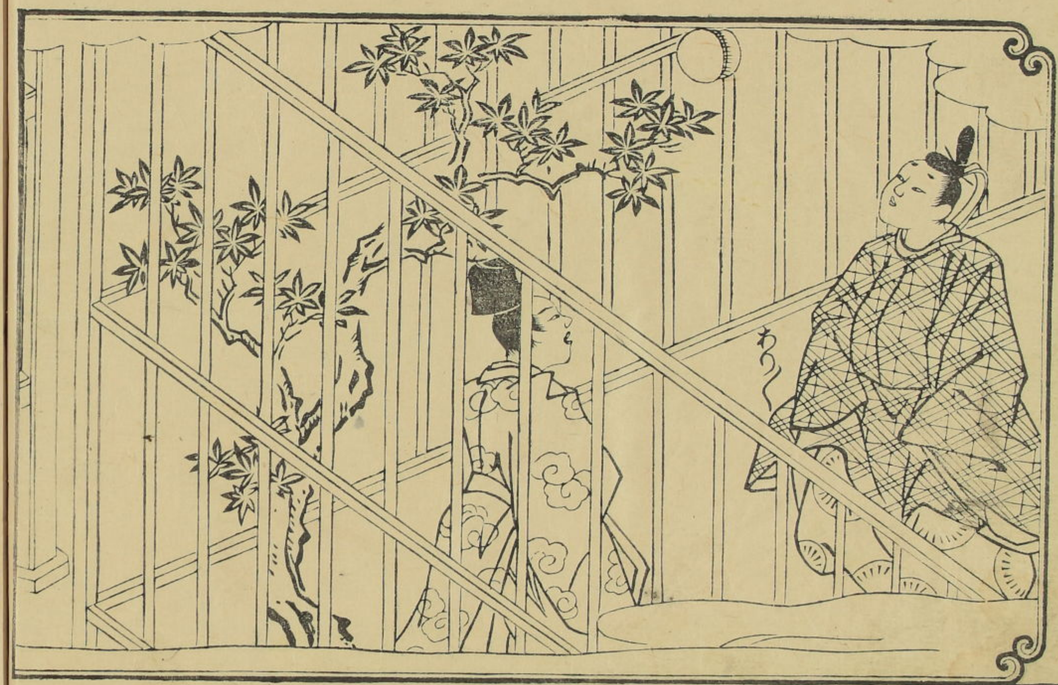

日時の長ッ
えてたれる
わさめ
えもこうなッ
みされまさ
ちゃう〜

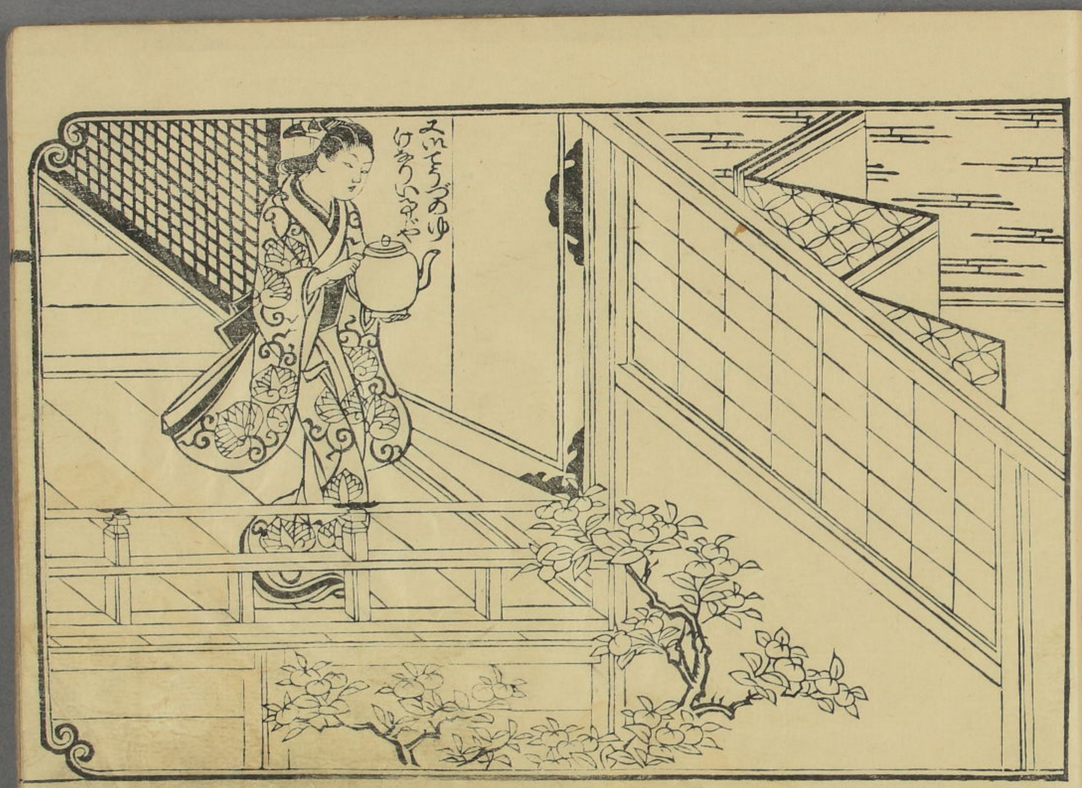

わろうやま〜
どうや
上気七
てりゃ
あれ

ぶつくいたるやく
ようがせんべさんと移
かくあたりまさるなる
たきあきだやふるみりもりへ
まよふ


まろうがたづねあく
新まぢへこそよく






みいちゃのゆ
けさりいやや

繁の伍作
いろいろ
ものさしも
ぬきまあす
あんたのこたち
ものませね
こりゃ
下を
ねりゃ
ぬまし

隠川

奥州の云庵とゐる所の文庫

玄宗皇帝楊貴妃と共に他ゐて自慢の
あまりの面よりも粉をかざり、男よりは強く
言ひ、云へば切りあり嫉妬して嫁乃美
僧賢ふわるごとして謙山美しく温泉と
ひつまして、国々をつたへてある美人へ
ふすまのごとく我出の事をのけて重て乳房
かくしと尾出の女中のうるわしい作て古歌
とろくへかんよ井の中の蛙鶏鹿焼物焼
よろかちんの貧せごいへの評判とおも
つて今も云伝へくのおれおそれつく
天人りつつ云程の出男出ふとれ出
わごりとて面倍の亨りよ作述まうせれ。

そよりよれ沿夜とりして、かう常も仕給ひど
れ紛れよ書と焼みゆさうの勇とのれ楽
寝のあれ稽えづひの女をみさうへ絵
術れくさわそ女のれ中とり丸寄も中も
わる程ねどひてかんちんのれもへ海ゼよ。
いふ女の男と女ふ細ゐ中とみて
かくもさうとへ筆先もれ中ゐ
分のうた下このもとへ名別同くゐる
に生れていふちづくるゐでういふへ
ん女ふ孫どれ肌さうふいふもゐくで
世界の久しまうわて玄のどがうーと
ありどうそ後れタ化粧あそべさうく
後神墓よかうー拾ふ七三人あまろれ
大陸よむうへせゐへれ耳の中とこゐ

ゆゑ多くは皇の宮ともそうぢれ役人それ
くみは化粧の上手眉の作りまぶたの
役目ひとうくゆりの彩りて後うつてゆ
美人は文よし仕立ればうつくしうてゆ
とこゞろ強づくのおかぬけされければ
白粉のは内衣もおねーのまーて紅も
むとひ給ひ場てはよ者もへり風情と
つくらせてはあるよ産とあそびーける
はあるのうつくしさ中く大極の事ゆえ
わくぶどせよ何よりてたとえんめ
あーつきぐの女福三十はゆへもあり
けるぶ十七八よりうこ十はゆをこのとどうそ
しる艶ある生れつき撰出ーうを元程
ゆえそろふまのできぶいづれも無きれいぶ

今とは中の男といふものとうぐど傾世法の
おさーたとえんてはいとうごうとかゆ花も欲
もなくでひるものこよりひてし傾城
ざうし下細のまわる程女他ーをせめて
猫とろうと中るは家女をうゆ入つて
是疾病とやわげらうぐとさけばいろ
とてもわるゆは交深き事の信者とる
つ業切ーてせよ男女のかくいう
別よのーこゆあーはあ女ふもかくは
果報いこーたは者とゆは生れわそぐ
ぬれたぐでひとうは肝んのは事のうけぬる
事おそれるぐうは者こたぐ者よつ海されて
ーかはいこ海ーうぐは生るうぐせよ
はあやりゆは五尺あどゆつまそふまよ

とうれ今うまれあいんろうもあるなと
いふにおと合点して一向よりひかて今もある
まゝにたゞかいとてゝびやうぶの屏風の
かゞゝに祝言の歌初花めいたるゝ海中に
今まゝでてうどめ年ゝ流よ寄るみとて
ひお屋形へねゝせらるゝもみくわて夏
ゑねとねゞさしよわそぜとみ色やこねな
殺生とうやいよべゝあ元といふめいふ
ちりゝろれわろぞさうとかゝゝある
まゝたるみとちりゝど藤倉屋も寂
鮫ゞおとに元で何せもゝゝわゞらゝ事
わゝろあとよゝゝゝいわよ沢山つかろく
ゑよとゝいづまも何とそうてとやひや
せべけおゑ笑るのやうあれわゞゝやそう

わゝげよ行くまゝゝハ海とうゞう祝ひて
ゆゝ雅よんせよ人人ゝゝで繁そうかと
して佛ようゝへせわて来せでハ家そゞと
所とゑれねやうかゑみりつやうよ居せと
いのうう伺とそびおそひとやたこて
ゑれよゝと沉後ゞ海せゑべ産中ハ女中も
ゑんへとうゝなりてさもよ後とこゞ
けるそ中に約束ゑ元小舟といる女の
やけるへでゆうかゞゝそへゞやうよ
わそべゝゑべ爲ゑよかんようあいき
るくゝけわゝと上膳とそして中上べ
何とそさやうのよ四条わゝべてくう
やわけねで片付もやうその仕掛とや
こうやとゝやせやく伺ゑんべゞ上るも

くらべかうあく今とひうくまいつせうし。
極もいたんしもいしもわようてのゆうこ
程よくづを切る義男のとまつねわの
ゆうにぶうとて八ぐつよん女うみとゆう
ゆせごくゆせとどとうーれとうひさごん
めていさ海きのくべされべ別の方俗ゆても
さふうくどこ義ゆよ和尚のろれ生人京の
れ所おのと楽しーゆもさうれ思案ぶ投へ
ゆう見ぶのとうとれさ移ひてろ元と色
しゆふれこ家めれよ兵ううちうゆろれ風俗。
その好まきのれ人ゆ行ってそれ小性ーの冊義ゆ
笑が人ゆ行ってそれ小性ーの冊義ゆ
門徒とうさゆろのれ好ゆとゆてれ登報
ふれなこ仕ってそれとゆて京ちろれ寧人へ

りのくさうれ目人へと報ひちうとゆあげ
さ社ねれあ義とどうと出ーちんゆ
れあのれ物れの義ちうとそひ寝ゆそ
どーてうう。行ゆよお報もれらんなされ移べ。
義元ゆ仕ゆまーうう。行れん報ゆのされ
まーじ付ゆひくくとりちうけてお家へ
の付もをまくろ元のどくゆてどーて。
義ゆ義ゆくくれ人ーどうのゆとくーうう
あげ義られをゆ上でうそどうで女ろ元文。
おりおとくーゆうるくーひ四ーハゆうさゆ
ゆとゆせべさうとれちどろ元入る智男。
女掏ともいひつべ。そ尾うく仕員せゆべ。
女中のれ義ちゆ義ゆゆーつべ。般ゆくゆと
いゆゆゆとれでんじゆくゆ真のろ元し

おぢ〜也て如月めぐりせうべ、ハテ　それそで
みるとひとまくさ付へう〜ろくでも元のけ
うい〜ろいと、ふまひくこの大多ひと拾で。
ひてうかれ小性也〜の丹誠とられ給こと
給わくわられて変毒のおぬかさろくやうに。
弓元よつろうて第〜せうて給われば丹誠
者西よ申つてけおめのおぢ〜とうでかく
切ヤレまとこ月代とそうなり俄よ今拾の
大小自流ある弓元りやうの羽織とてのこ
れわぢ〜と男ら〜くあ〜七よ濃り多紅
のぶ者るよこえんとつるといふごとつう
ある多くの小性とまかとやどわうて自信
立ふるまいわぢ〜ともそ後の美児年。
うろくたれ乃大的祢も女中とたろう

しあつて地のよいわ八何文りよそあてもわろ
う〜妄者の美女と男色よそ乃の初恋な
奴ぶ仕そこ程よ今ちこれ例よめこまて雲
せうまつ美め人年八ひとよ元の側乃
深山木の文書もあるぶどくれ新ぢろう
自信ぶ〜おつとれ世界の弓元自彼信西
真雅のいろひぐこそとぬ〜これ業平の
弓盃桂海律師ぶんとて花〜梅乃れ
白いも今ひ元ちよおぶまりどれ自ろんの
時ろう貴毒れきぶんかる弓元まる稼う
ぶるよ者るのへひとよ元乃真加よけふ
ていふりの元氣真実よぬねこんぶ
毒でねつゆとこのふぢまくれ義抜あつて。
れ西毒とでわられ拙疾よ入ねれば家の

まるべくこれなんぬしとしてそとはわらし程よ。
ひとりとしてかんつぎとさて帯して何と仕
らるべきなんもちがひしてこゝでこれのこれ云
にへろなりよりおよびあきさまてトされませと。
うつよりせのへ〳〵程よりはゆてつどもあ
ぬよりて今かてもちがなと川俣黒と思
とつくせとれくうつくあくせうきにふ
さんのよへいどこれをのひてやとう肌とさとう
せのひぬくびつらりとてけどべくへ何
めてやみべくでこれまれつきぬかりよ市
とびまるとにさんなんどくもいきごき
ヨけまるどをとう〳〵氣のどくぬりも
わるべくもづくこれのへなれでくうくべ
あんをよあくりせとれ裸身とまてこれ法

がりのれ家さどれれおれへくこめて者乃
そどがりよさうり結へれんの中りどくと
身ゆくもおゆる升越身うるひどろて
れいきさくもわくせへさ者へ賞氣へ
くりれゆよあくへいあ申てひへさ者へ
こそお情のさへ今まあり程くれのつのて
れんどとれいきぬさやむつくせさ者へ
程よりかんめくくらでめてさどつ乃ゆる
まひおれかんがくあ。かゆて先とうを
そうくとのあわくらい今へとやつむよ
人のゆきまくどりとあへひをられ。コレ
者あれゆくへあ者れでへどれせね裏てどう
ようもく今とりちがさしめたのそ。
ひお根ゆ手えへあ女の光れゆくわくまも

あるひとはてそれとこのつぐでもぶぐで
うめ桃とうつ〜ゑをとるくゝをもめてはへ
不仮しくおぐしめされすてかてどれをへ
ゑへひけんゝ庵とはらるとらひつゝまこ
めんぢんのまめてのさうふりざうもりち
こゝろうれねりどいんとてこゝ切てわりしゝ上
ゑれべゝとゝへ殺ぶわやまう仮長り仮
がくとゝとべし何ゝもおぐじ〜とゝと
わふされそきとうつ〜て女中のらゝもと
おぐゝゑひて今とゝとらまつ〜おぐ
づらひのゑかつ〜ぞおりゝきけり

御一面風流